

「書籍空間論」の意義と課題 —授業の方法と内容を中心に—

Relevance and Challenges of “Library Spatial Analysis”:
Focusing on teaching methods and content

石川 敬史
ISHIKAWA Takashi

要 旨

本稿は、本学教育人文学部文芸文化学科の専門科目であり、司書課程選択科目でもある「書籍空間論」（以下、本科目とする）の方法と内容を検討し、本科目の意義と課題について報告することを目的とする。具体的には、①レファレンスPOPの作成・展示、②角川武蔵野ミュージアム見学、③「ひとハコ図書館」づくりと展示、④独立系書店、シェア型書店における棚づくりへの参画という4点の授業内容を中心に、これらの授業方法と展開を検討した。その結果、本科目の意義として、①本を媒介とした自己表現の場づくりとして位置づけられること、②個々の受講生が制作した作品が、実際の展示によって受講生全体としての作品へ再編成され、個々の作品を互いに認めあう場が醸成されていくこと、③小さな一つひとつの活動そのものが、参画へと進む道筋や参画への連鎖を拡張させていく可能性を有していることを明らかにした。他方で、本科目の課題として、①アウトリーチやリテラシーという視角に乏しいこと、②移動や巡回という能動的な実践の可能性、③技術的な課題や、受講生評価の分析が十分ではないことを示した。本科目は今後も、眼前の書籍空間という閉じた場に留まり続ける展開に終始するのではなく、自らが生活する地域社会への参画、シティズンシップや主体性の形成など、多くの人々とのつながりと巻き込み、これらの拡張を意識しながら展開していくことが求められる。

1. 授業実践への視角

本報告では、本学の教育人文学部文芸文化学科の専門科目であり、司書課程選択科目でもある「書籍空間論」（以下、本科目とする）の方法と内容を検討し、本科目の意義と課題について報告することを目的とする。

本科目は、2020年度の本学の改組に伴い、教育人文学部文芸文化学科の専門科目に新設された科目である。文芸文化学科のワークショップ科目群に位置づけられ、半期2単位（前期土曜日3時限目の開講）の科目である。同時に、司書課程の選択科目（法令上の科目は「図書館基礎特論」、全学部全学科の学生を対象とした開放科目）に位置づけられているため、履修生の多くは司書課程履修者で占められている。こうした本科目の新設・設置の意図として、以下の2点がある。

第一に、街の本屋が減少し無書店自治体が増加¹する中で、独立系書店やシェア型書店などが拡大していることにある²。独立系書店とは、個人（もしくは団体）が経営する比較的小規模な書店であり、大手取次を通さずに独自に本を仕入れ、もしくは出版社や大手取次と取引を行いつつも店主の売りたい本を積極的に揃え販売している書店である³。他方、シェア型書店とは、書店内の棚や区画を複数の棚主が間借りし（月額有料制）、展示・出品して共同で本（さらには雑貨やグッズ等も含む）の販売する書店である。書店主や棚主、来店者との交流の機会や書店主・棚主によるイベント企画なども展開されている⁴。このほか、みんなの図書館（みんとしょ）⁵という「一箱本棚オーナー制度」を導入している民間の図書館（シェア型図書館）や、磯井純充による「まちライブラリー」⁶の蓄積と展開もある。

これらの書店や図書館に共通することは、店主や棚主に内在した思想や価値観を背景とした個性的な選書が展開するとともに、本を媒介とした「場」がつくられ、コミュニティの形成や地域社会の参加や参画への契機となっている点である⁷。

すなわち、本科目においては、「書籍空間」づくりに対して、自ら制作するPOPや、自ら設計する展示コーナーづくりなどの技術的な手法に留まることなく、本を媒介に他者や地域社会との関わりあいを導き出す過程を創出していく可能性について、本科目の演習を通して受講生が考察することができるのではないかと考えたことにある。

第二に、本科目の前身（旧科目）である「図書館基礎特論」のほか、文芸文化学科2年生の演習科目である「文芸文化ゼミII」の課題と実践の連続性である。前者の科目は、2019年度まで司書課程選択科目（1単位）として位置づけられていた旧科目である。埼玉県男女共同参画推進センター（With youさいたま：埼玉県さいたま市）の協力を得ながら、同センターの主催講座と連携して同センター情報ライブラリーの図書展示を企画してきた。また後者の科目は、2015年度に本学の短期大学部が改組され文芸文化学科に新設された科目（必修科目）である。2年生後期の開講のため、2016年度から開講された。同科目では、ブック・コーディネータの内沼晋太郎による『これからの本屋読本』⁸を読みあい、「本屋」の可能性について議論したうえで、受講生各自が独立系書店やシェア型書店を調査し、同書店設立の経緯や書店主の思想、選書・排列、行事・活動等について口頭発表と受講生による考察を重ねてきた。

しかし、両科目において現場や実践との関わりあいを意図していたものの課題が内在していた。前者の科目では1単位（8コマ）であるため、外部機関の協力をいただきながらも、展示作業を行うことに終始してしまったこと、同センターの主催講座の趣旨に関する範囲内においての選書と展示テーマを設定するという課題もあった。また後者の科目では、受講生とともに独立系書店等の具体的な活動内容を議論し考察することができるが、自ら実践に向きあい、その実践を通して地域社会との関わりからこれら書店の可能性を具体的に考察するまで結びつけることができなかった。

本科目は2024年度に開講4年目をむかえた。こ

の間、コロナ禍の影響もあり、本科目が開講した2020年度から数年は、外出やグループワークなど演習内容に大きな制約が伴う授業展開となっていました。そこで本稿では、本格的な授業の展開が可能となった2023年度と2024年度における本科目の方法と内容を対象に検討し、本科目の意義と課題を報告する。

2. 「書籍空間論」の概要

本科目の性格は、シラバスにおいて次のように記している（2023年度、2024年度）。

本科目は、図書館司書課程の選択科目であり、文芸文化学科の専門科目（2年以上配当）として位置している。近年、図書館や書店をはじめ、カフェなどの商業施設などにおいて、書籍（図書、雑誌、灰色文献等を含む）を選択し、展示（排列、POP等の制作）する魅力的な「場」づくりが広がっている。本科目では、出版流通の特徴、図書館のコレクション構築のプロセス、書籍等のさまざまな資料の種別を踏まえつつ、サードプレイスの理論やコミュニティデザインの手法も理解しながら、さまざまな書籍を媒介に人々が集う空間の意義と特徴を考える。

先述の通り、本科目は司書課程の選択科目としても位置づけられているため、日本の出版事情や出版流通の動向や課題をはじめ、図書に限らず多様な資料の存在や、図書館におけるコレクション構築のプロセスなども意識しながら授業を展開している。2023年度の受講者は25名、2024年度の受講者は27名であり、例年約8割から9割が2年生である。本科目の授業内容は、外部機関との調整もあるため、シラバスの掲載内容と若干の前後があるが、大きな方向性としては以下の通りである。

(1) 2023年度

- ・第1-3回：日本の出版流通の特徴、独立系書店、シェア型書店、みんなの図書館、まちライブラリーなどの事例紹介、これら書店等の共通点や構成要素、社会的意義（サードプレイスの概念、コミュニティデザインの手法、市民アーカイブも含む）などの検討
- ・第4-5回：レファレンスブックの分析と解題、レファレンスPOPの作成、発表、本学図書館内での展示
- ・第6-7回：角川武蔵野ミュージアムの見学と分析
- ・第8-13回：「ひとハコ図書館」の事例紹介、制作にあたっての留意点、検討、制作、口頭発表、本学図書館内での展示
- ・第14-15回：本学図書館内展示物の撤収、振り返り、まとめ、書籍空間の考察

(2) 2024年度

- ・第1-3回：日本の出版流通の特徴、独立系書店、シェア型書店、みんなの図書館、まちライブラリーなどの事例紹介、これら書店等の共通点や構成要素、社会的意義（サードプレイスの概念、コミュニティデザインの手法、市民アーカイブも含む）などの検討
- ・第4-5回：レファレンスブックの分析と解題、レファレンスPOPの作成、発表、本学図書館内での展示
- ・第6-9回：「ひとハコ図書館」の事例紹介、制作にあたっての留意点、検討、制作、口頭発表、本学図書館内での展示
- ・第10-11回：角川武蔵野ミュージアムの見学と分析

- ・第12-13回：シェア型書店、独立系書店の見学、同店内での展示設営
- ・第14-15回：本学図書館内展示物の撤収、振り返り、まとめ、書籍空間の考察

本科目の前半では、近年の出版流通の動向、独立系書店等の事例や特徴をはじめ、本を媒介とした居場所づくり・まちづくりについて講義したのち、中盤から後半にかけて「ひとハコ図書館」づくりなどの演習を重ね、加えて角川武蔵野ミュージアムを見学することで、地域に位置する本を媒介とした「空間」や「場」の可能性を検討していく。授業の開講は、先述の通り前期土曜3限目の配当であるが、演習や成果物の口頭発表・共有を重視するため、第6回以降は受講生の予定と相談しながら3-4限連続（隔週開講）としている。

なお、2023年度と2024年度の違いとしては、①角川武蔵野ミュージアムの見学が「ひとハコ図書館」の制作に前後すること（先方の開館日や本学の学事暦に左右されること）、②「ひとハコ図書館」づくりの授業回数の違い（2023年度は6回、2024年度は4回）、③学外の独立系書店やシェア型書店と連携した授業展開（2024年度のみ実施）である。

こうした本科目の履修を通しての到達目標については、次のようにシラバスに記している（2023年度、2024年度）。

1. どのような場所で、どのような方法によって書籍を中心とした空間がつけられているのかを理解し、説明することができる。
2. サードプレイスの理論やコミュニティデザインの手法を理解し、その手法を用いる社会的意義を説明することができる。
3. 魅力的なPOPの制作の方法をはじめとした書籍の展示手法を習得し、実際に作成・展示することができる。
4. 来館・来店者の視点で、テーマの設定、選書、展示という流れを企画立案し、実行す

ることができる。

これらの到達目標は、先述した本科目の新設・設置の2点の背景に通じている。すなわち、POP作成等の展示コーナーを設計する技術的手法の修得に限定されず、本を媒介に居場所やコミュニティが形成され、地域社会への参加・参画へ結びつく可能性を受講生自ら実践を通して考察することにある。

次章では、到達目標を達成するための本科目の授業内容の柱である、①レファレンスPOPの作成・展示、②角川武蔵野ミュージアム見学、③「ひとハコ図書館」づくりと展示、④独立系書店、シェア型書店における棚づくりの4点を対象に、具体的な授業方法と内容、その意図を検討する。

3. 「書籍空間論」の授業展開

3.1 レファレンスPOPの作成・展示

レファレンスPOPとは、レファレンスブックの特徴を分かりやすく利用者に伝え、その利用の動機づけを促す小型のカードであり、一般的なPOPの手法を応用したものである。このPOPは京都女子大学の桂まに子が2010年に考案・命名⁹、現在では三重大大学の長澤多代¹⁰なども授業において実践している。桂が指摘しているようにレファレンスPOPの役割とは、①レファレンスブックの魅力伝える発信型情報サービス演習の一手法、②利用頻度が低いレファレンスコレクションの可視化、③作成したPOPを共有するなど授業成果物を用いた学習支援という3点をあげている¹¹。

本科目では、桂が指摘する役割に加えて、①一般的に書店で扱われないレファレンスブックの意義について、その解題を行いながら受講生が検討すること、②図書館における展示コーナーの理念（司書の選書を押し付けるのではなく、利用者に考える材料を提供すること、考え・学びの契機につなぐ工夫）を意識して実践すること、③受講生一人ひとりの作品・展示物が、受講生全体の資料

群・作品群として一体的に演出されていくことに留意している。

本科目におけるレファレンスPOP作成・展示について、具体的な授業展開は以下の通りである。

- (1) POPを作成するレファレンスブックの選書（2冊，本学図書館にて）
- (2) レファレンスブックの解題（書誌事項，語彙数・掲載範囲，排列方法，編集方針・採録方針，索引・付録の工夫についての調査），解題の共有（グループワーク，口頭発表）
- (3) 選書したレファレンスブックを用いて回答できるクイズの設計（利用者をひきつけて，レファレンスブックを手にするような質問の設計）¹²
- (4) POPの作り方とコツ，POPの事例紹介（POPに記載する項目，POPをつくる考え方，利用者視点でのキャッチコピー・言葉の工夫など）¹³
- (5) 作成したレファレンスPOPとクイズの共有（グループワーク）
- (6) レファレンスPOPの展示設営（本学図書館2階閲覧室）：写真1，写真2（以下，写真は全て著者が撮影）
- (7) レファレンスPOPの可能性，展示コーナー設営の可能性の検討（グループワーク）

レファレンスブックの解題や各グループワークについては，授業担当者がワークシートを作成，配布した。受講生個々人が考察しワークシートに記入した後，グループに分かれての意見交換を展開した。



写真1 レファレンスPOPの展示 (1)



写真2 レファレンスPOPの展示 (2)

3.2 角川武蔵野ミュージアムの見学

2020年11月に開館し，公益財団法人角川文化振興財団が運営している角川武蔵野ミュージアムは本学から近い所沢市（JR武蔵野線・東所沢駅徒歩約10分）に位置している。同館Webページには以下のように施設概要が記されているほか，近隣の小学校との連携事業・教育普及事業については藤原みなみの報告¹⁴がある。

図書館・美術館・博物館が融合した文化複合施設。編集工学者・松岡正剛，博物学者・荒俣宏，建築家・隈研吾，芸術学・美術教育の神野真吾による監修のもと，メインカルチャーからポップカルチャーまで多角的に文化を発信する。

同館へは本科目において2021年度から見学させていただいているほか，石川研究室において2021年2月と2021年10月に「選書ワークショップ」¹⁵

を実施させていただいたつながりがある。

本科目における同館の見学については、松岡正剛の監修によるエディットタウンと本棚劇場を中心に、本科目で制作する「ひとハコ図書館」への視角を発見すること、「書籍空間」を構成する条件を考察することを目的としている。受講生には見学記のレポートを課しているが、見学の際の具体的な視角として、本科目では以下の3点を示している¹⁶。

- ①選書と排列：どのような分類のもとにいかなる図書が並んでいるのか。
- ②展示と演出：来館者をひきつける図書の展示方法や演出方法の工夫や特徴。
- ③付加価値とメッセージ性：椅子や机、掲示、照明など、来館者の導線や動きにも留意しながら、書架に並ぶ図書や空間全体に対する付加価値とメッセージ性を解説。

同館の見学は、本科目授業時に概要を説明した後、現地においては自由見学となっている。同館では、通常用いられている図書館の日本十進分類法とは異なり、以下の9つの「書域」（大分類）のほか、「書域」に約15の「書区」（大見出し）、そして「書区」に約10の「書列」（小見出し）から構成¹⁷され、本がにぎやかに演出されていることに受講生は引きつけられていく。

ET1「記憶の森へ」、ET2「世界歴史文化集」、ET3「むつかしい本たち」、ET4「脳と心とメディア」、ET5「日本の正体」、ET6「男と女のあいだ」、ET7「イメージがいっぱい」、ET8「仕事も暮らしも」、ET9「個性で勝負する」

とりわけ、本科目における見学では、これらの個々の分類と選書など眼前の本棚の演出とともに、エディットタウンという書籍空間全体の演出を鳥の眼で眺めていくことにより、「ひとハコ図書館」の制作や、独立系書店、シェア型書店の特徴や構成要素の考察に活かしていくという意図がある。

3.3 「ひとハコ図書館」の制作

「ひとハコ図書館」とは、小さな箱（カラーボックス等）をひとつの小さな図書館に見立て、この小さな図書館の館長がお薦め本を展示・演出していく活動である。小さな図書館を複数並べることによって、「ひと（人）」と「ハコ（箱・図書館）」をつなぐ場がつけられること、また一方で、小さな箱ではあるが、「一箱」で小さな図書館を演出する意味も込められている。例えば、東久留米市立図書館では、「図書館フェス2023」において15館（箱）の「ひとハコ図書館」が展示された¹⁸。同館では、2015年から「図書館フェス」において「ひとハコ図書館」を展示し、「市民の考えた小さな図書館」を一堂に集めて見せる、「ひと」＝人、「ハコ」＝図書館を融合させた、「ひとハコ図書館めぐり」という交流型展示¹⁹として企画した実績がある。この企画は、「一箱古本市」²⁰や「マイクロ・ライブラリー」²¹から示唆を受けたという。また和光市図書館においては、2020年3月から一定の期間を定めた「みんなのひとハコ図書館」を開始し、2024年9月現在、18回の展示を数えている²²。

こうした公共図書館の事例を参考に、本科目の演習においては「ひとハコ図書館」づくりが授業の中心として位置づけられている。とりわけ本科目では、①「ひとハコ図書館」という成果を他者と共有することによって、本を媒介に受講生同士の意見交換の場が形成されること、②「ひとハコ図書館」が自らの興味関心を表現する一つの手段であることを理解すると同時に、他の「ひとハコ図書館」のテーマや選書、思想を尊重し共感する契機になること、③単に1冊の本への付加価値を検討するのではなく、箱の中のコレクション群全体を演出すること、すなわちテーマの設定への考え方、選書や排列など受講生による意図が重要であることを理解する点に留意している。

本科目の「ひとハコ図書館」づくりについて、具体的な授業展開は以下の通りである。

- (1) 前回までの復習（独立系書店等の特徴、POPをつくる考え方・コツ、展示コーナーの意義など）
- (2) 「ひとハコ図書館」づくりのポイント解説（事例に基づきながら、テーマ設定の視角、選書、排列、コレクション群への付加価値、解説・案内、演出方法、参加型の仕掛けづくり、図書館内の多様な資料の存在など、ワークシートも配布）
- (3) テーマ設定と選書（本学図書館の蔵書が中心であるが、受講生所有の図書等の持参も可）、テーマと選書結果の報告（グループワーク）
- (4) 「ひとハコ図書館」の制作（テーマ・図書館名の設定、POP作成、演出等の工夫等）
- (5) 本学図書館内に「ひとハコ図書館」の設営・展示（本学図書館の図書は団体貸出の設定、展示図書リスト・貸出票の作成、禁帯出シールの装備等も含む）
- (6) 「ひとハコ図書館」の各館長（受講生）による口頭発表（個人発表）
- (7) 「ひとハコ図書館」の撤収作業、来館者のコメント・メッセージの共有、「ひとハコ図書館」の可能性についての検討（グループワーク）

このうち、2023年度は6回にわたって展開したが、2024年度はやや少ない4回の授業を展開した。2024年度は後述する独立系書店、シェア型書店への見学と棚づくりへの参加を授業展開に含め

たため、「ひとハコ図書館」づくりに関わるPOP等の作成については、授業内での時間を短縮し、受講生への授業時間外の課題とした。

2024年度の「ひとハコ図書館」のテーマは以下の表1の通りである（受講生の一部を掲載）。これらのテーマを確認すると、館長（受講生）による本を媒介とした個性的な自己表現の場となっていることがわかる。自らの興味・関心を本の選書と演出を通して表現することで、「ひとハコ図書館」全体からメッセージ性が伝わる（写真3、写真4）。



写真3 「ひとハコ図書館」の展示 (1)



写真4 「ひとハコ図書館」の展示 (2)

表1. 「ひとハコ図書館」のテーマ (2024年度)

夜空図書館、心に一股図書館、有栖院図書館、名言・名作の図書館、Fashion Library、手芸図書館、ヒミツのジブリ図書館、魔女の家図書館、魅惑の喫茶店ライブラリ、グリム童話図書館、パン or ごはん図書館、かわいいとしょかん、デザイン図書館、絵世界への扉～西洋編～、ムーミン図書館、梅雨図書館、ぐっすり睡眠図書館、リュウの巣図書館、図書館の主役は我々だ、古式ゆかしい和風ファンタジー図書館、シンデレラ図書館

3.4 独立系書店、シェア型書店における棚づくりへの参加

2023年度まで本科目では本学図書館内における展示に終始していたが、2024年度より大学外の独立系書店、シェア型書店での連携活動を展開した。その目的は、①実際の「現場」に足を運び、店主による書店設立の経緯やその背景となる思想を確認すること、②店内の書架（選書、排列、シェア本棚の表現内容等）を確認し、自ら制作した「ひとハコ図書館」と相対化すること、③行事やイベントも含め、本を媒介とする場所づくり、コミュニティづくりに求められる条件について、店内を具体的に観察して考察することにある。

訪問・連携する書店であるが、これまでに石川研究室が2022年度から棚主となりシェア本棚として参画している「本と喫茶 夢中飛行」（埼玉県さいたま市）と、2023年11月に開業し、本学の文芸文化学科へ連携の問い合わせがあった「でこぼこ書店」（埼玉県さいたま市）に協力をいただいた。両書店の詳細は以下の通りである。

(1) 「本と喫茶 夢中飛行」²³

旧さいたま市立大宮図書館のBibli（ビブリ）内に2022年にオープンしたシェア型の書店・図書館の「ハムハウス」が前身である。2023年8月に、Bibliから徒歩5分ほどのビル2階へ移転し、リニューアルオープンした。店名に「本と喫茶」という文字も刻まれている通り、コーヒーやアップルの提供も行われている。店内には木製のシェア本棚が広がり、1ヶ月1棚3,300円で本棚オーナーになることができる。現在は約80人の本棚オーナーのほか、約400人の貸出会員（年会費1,320円）がいる。店主はデザイナーの直井薫子であり、店内では本棚オーナーが持ち込み主催するイベントを含め、本に関わる多彩なイベントが開催されている。

(2) 「でこぼこ書店」²⁴

2023年11月にオープンした「でこぼこ書店」

は、元大学職員でキャリアや学び支援などに関心のある富井弥が店主である。本という存在の間口の広さに惹かれて同店を開業した。1階には富井が選んだ新刊の棚のほか、8区画のシェア本棚が、2階には古書の棚のほか貸しスペースがある。本に関わる数々のイベントも店内で企画されているが、とりわけ富井による「書店×教育」という関心のもと、2024年からは小学生対象の国語の教室や、中学3年生までの学習サポート塾も展開している。

両書店のうち、前者はシェア型書店・図書館、後者は独立系書店として位置づけることができる。両書店は小規模であるため、本科目の受講生を2班に分け（A班：夢中飛行、B班：でこぼこ書店）、棚づくりへ参加した。実際の見学時においては、A班、B班ともに書店内にて、設立の経緯や目指す方向性など店主の理念をお話いただいた。同時に、以下のような本科目受講生による図書展示をさせていただき、棚づくりに参加した。

・企画名：「Un Known Books」

・テーマ：好き

・方法：「好き」をテーマに各受講生が1冊の本を選書し、小さなカードにその本に関するメッセージを記入。本をクラフト無地の袋に入れ、カードを袋に貼りつけ展示する。

具体的な本の著者名やタイトルは分からず、来店者がメッセージカードを頼りに袋を開け、意外な、新たな本との出会いを楽しむ仕掛けとしての展示である（写真5、写真6）。



写真5 夢中飛行における展示



写真6 でこぼこ書店における展示

この「Un Known Books」の方法は、各地の公共図書館で行われている福袋貸出（セット貸出）や、（株）バリューブックスが運営する独立系書店「NABO」²⁵がかつて実践していた「Un Known Books」の展示から着想を得た。両店に展示した受講生によるメッセージと選書した本は、以下の通りである（受講生の一部を掲載）。

- ・生きることと、それから、愛を考える（岡部えつ『母をさがす：GIベビー、ベルさんの戦後』亜紀書房, 2024.3, 269p.）
- ・かわいいあのキャラがムズかしい本を簡単に解説（哲学の入門書!!（朝日新聞編集部編『マイメロディの『論語』：心豊かに生きるた

めの言葉』朝日新聞出版, 2014.12, 126p.（朝日文庫；あ63-3））

- ・人生が嫌、生きるのが辛いあなたへ（瀬尾まい子『夜明けのすべて』文芸春秋, 2023.9, 270p.（文春文庫；せ8-5））
- ・ちょっと立ち止まって、知らない有名な話を読んでみる（林家たい平『はじめて読む古典落語百選』リベラル社, 2021.1, 245p.（リベラル文庫；は-2-1））
- ・子どもの頃の視点を感じたい方へ（有島武郎『一房の葡萄』角川春樹事務所, 2011.4, 111p.（ハルキ文庫；あ20-1））
- ・あなたも一緒に花束を（ダニエル・キイス著、小尾美佐訳『アルジャーノンに花束を』新版、早川書房, 2015.3, 462p.（ハヤカワ文庫NV；1333））
- ・ミステリー アクション ラブコメ はじまりの1冊（青山剛昌『名探偵コナン .volume 1』小学館, 1994.7, 181p.（少年サンデーコミックス））
- ・ちょっとした時間に小さな安らぎをもらえる一冊。日々、さまざまな場面で揺らぎ続ける心に寄り添います。（川口晴美監修『小さな詩の本：TOUCH YOUR HEART』リベラル社, 2022.11, 256p.）
- ・幸福を掴みたいと願っているあなたへ（アレックス・ロビラ、フェルナンド・トリアス・デ・ベス著、田内志文訳『グッドラック』ポプラ社, 2004.6, 119p.）
- ・あなたも一緒に花束を 百合はじめませんか？（伊藤計劃『ハーモニー』新版、早川書房, 2014.8.（ハヤカワ文庫 JA；1166））
- ・技術が発達した今、もう一度読みたい（川原礫『ソードアートオンラインホープフル・チャント』アニプレックス, 2017.2, 97p.）

両店内において、これらのメッセージと本の紹介、選書した理由などを受講生各自が口頭発表し、その中に店主も加わっていただき、店主・受

講生同士で意見交換を展開した。独立系書店やシェア型書店という現場において、こうした書店を設立した意志を有する店主とともに、受講生が自ら選択した1冊の本と意思を込めたメッセージの共有を通して、本を媒介とした小さなコミュニケーションが共感を広げ育むこと、そして、こうした書店内での一つひとつの活動が、他者や地域社会との関わりあいを導き出す過程であることを発見するという意図が本科目に込められている。

4. 「書籍空間論」の意義と課題

ここまで、2023年度、2024年度の本科目の授業方法と内容を報告した。最後に本科目の意義と課題について検討していきたい。

まず本科目の意義として第一に、本を媒介とした自己表現の場づくりとして位置づけられることである。確かにビブリオバトル²⁶においても本を媒介とした対話型による自己表現の場が時限的に形成され、新たな本との出会いがつくられていく。他方、例えば本科目における「ひとハコ図書館」づくりにおいては、テーマの設定、選書、排列、コレクション群としての演出など、自らの興味・関心に対して、小さな箱（図書館）の範囲内でじっくりと時間をかけて自己の表現が形づくられていく。レファレンスPOPや「Un Known Books」づくりにおいても、1冊の本ではあるが、まずは各自が選書に向きあい、本に対する自己のメッセージをじっくり検討していく。このことは、本科目によって、自らの興味・関心に向きあう時間を意識的につくることに通じるとともに、複数の受講生による展示（公開）が前提であるため、他者の視点や自らの相対化を射程に入れたうえでの自己表現であるといえる。

そして第二に、個々の受講生が制作した作品が、実際の展示によって受講生全体としての作品へと再編成され、個々の作品を互いに認めあう場が醸成されていくことである。すなわち、授業を通して受講生個々人は、まず眼前のレファレンス

POPや「ひとハコ図書館」、「Un Known Books」の作成に取り組むことになるが、受講生全員による成果物の展示設営を通して、個々の作品から受講生全体の作品へと組み替えられることになる。このことは、本を媒介に表現した自らの思考や価値観が受講生全体の表現として埋め込まれ、受講生同士の相互承認や他者理解へつながることに通じていく。本を媒介にした自らのテーマと表現内容、価値観が受入れられることによって、自己肯定感の形成にもつながると考える。このことは、いわば独立系書店やシェア型書店、みんなの図書館における居場所としての特徴や、地域社会との関わりあいをつくるという社会的意義に対する連続性も内包しているといえよう。

第三に、参加と参画への気づきや発見である。受講生は単なる授業の履修者であり、書店への来店者という客体的姿勢に留まるのではなく、本科目を通して「ひとハコ図書館」の展示、独立系書店やシェア型書店での展示など、書籍空間づくりへの参加を実感できる過程を設定したことである。先述の第二の点と重複するが、自らも含めて多くの人々の参加を通して独立系書店やシェア型書店などの活動が育まれていくことを理解するとともに、このことは自らを受け入れてくれる地域社会・コミュニティへの参画にも通じていると気づき発見することに本科目の意義はあろう。単眼的には、本を媒介とするコミュニケーションや、人と人・本と人をつなぐ実践といえるが、こうした小さな一つひとつの活動そのものが、参画へと進む道筋や、参画への連鎖を拡張させていく可能性を有しているといえる²⁷。

その一方で、本科目の課題もある。第一に、本科目はアウトリーチやリテラシーという視角²⁸に乏しいことである。資料を例にあげると、例えば、LLブックなどの「やさしい資料」、さらには多言語の資料や「やさしい日本語」による資料や展示など、地域住民と資料に対する広い視野と理解が求められる。多様な本を媒介にしながら、受講生の気づきや学びあいを醸成し、より一層の他

者理解や相互承認を広げ続ける工夫が求められる。第二に、移動や巡回という能動的な実践の可能性である。本科目の実践を固定的に特定の建物内で展開するのではなく、学校や図書館など複数の「場」へ移動し巡回することによって、受講生の思いや価値観、個性も移動するとともに、本科目の目的も移動することにつながるのではないかと考える²⁹。第三に、技術的な課題となるが、レファレンスPOPの展示において演出の魅力が十分ではないこと（レファレンスブックに対する学びには結びついているが）、角川武蔵野ミュージアムへの見学後に受講生同士の学びや振り返りなどが十分ではないことなどがある。もちろん本稿で取りあげることができなかったが、受講生による達成度や授業評価、展示をみた来館者・来店者のコメントの収集と分析も必要であろう。

レファレンスPOPの作成、「ひとハコ図書館」づくり、「Un Known Books」の制作について、まずは個の表現からスタートするものの、眼前の書籍空間という閉じた場に留まり続けるのではなく、自らが生活する地域社会への参画、さらにはシティズンシップや主体性の形成など、多くの人々とのつながりと巻き込み、そしてこれらの拡張を意識しながら、今後本科目を展開していくことが求められる。

5. 地域社会の参画への視座

公共図書館が3300館を超えるなか、それでも住民発意の私設図書館が生まれる背景には何があるのでしょうか。

公立図書館研究者の嶋田学（京都橘大学）は、公共図書館数が増加している一方で、「みんなの図書館」や「まちライブラリー」の広がりについて、住民が生活する地域社会との関わりから問いかけている³⁰。続けて嶋田は、「自然災害やパンデミック、紛争や格差等により生きづらい空気感が漂う現代において、私たちの生きる地域社会

を、ケアし、ケアされるコモンとして醸成していけないものかと思います。」と私たちへ語りかける。

本を媒介に地域とともに生きること、地域社会への参画をとともに導くこと——嶋田の眼差しは司書課程に位置している本科目の目指す方向性にも通じる。本科目の今後の展開と可能性において、まさに重要な視座である。

謝辞

本科目の実施にあたり、「本と喫茶 夢中飛行」の直井薫子様、「でこぼこ書店」の富井弥様には、見学にご対応いただき、受講生による展示の機会をいただきました。また、角川武蔵野ミュージアムの山家いつか様はじめご担当の皆様には、毎年、団体での見学をお受けいただきました。本学図書館の皆様には、図書館内の展示、設営、資料管理等にご協力いただきました。本学文芸文化学科助手の田島萌乃様には、本科目運営の補助をいただきました。改めまして皆様に深く御礼申し上げます。なお、本稿には本学プロジェクト研究費（2023年度、2024年度）の成果の一部が含まれています。

¹ 出版文化産業振興財団, BOOK MEETS NEXT 事務局『BOOK MEETS NEXT』2024.9.この資料には最新の数値が掲載され、2024年8月末現在、全国無書店自治体は27.9%、1書店以下の自治体は47.7%としている。無書店自治体については新聞等でも報道されている。「書店ゼロ自治、全国で26%: ネットでの無料配送規制の議論も」『朝日新聞』2023.3.29.

² 荒井宏明ほか『全国旅をしてでも行きたい街の本屋さん』ジービー、2018.8, 191p.; 和氣正幸『東京わざわざ行きたい街の本屋さん』改訂新版, ジービー、2024.8, 159p. など多数の書店を紹介する書籍が刊行されている。

³ 篠田博之「既存の出版流通と異なる独立系書店が増えている」『街の書店が消えてゆく』月刊『創』

編集部編, 創出版, 2024.5, p.142-151. このほか店主による図書や独立系書店, シェア型書店を報道する新聞記事なども多数ある。

⁴ 直井薫子「インタビュー・シェア本棚の意義は小さくありません」『望星』54(9), 2023.9, p.62-69.; 和氣正幸「小売店であり, コミュニティ棚貸し本屋の“肝”はバランス」『週刊エコノミスト』100(19), 2022.5.17, p.74-77. など多数。

⁵ みるとしよネットワーク「みるとしよ」< <https://sancacu.org/>> [参照日:2024.09.21].; 土肥潤也「市民の参画を生み出すみんなの図書館さんかくの実践」『月刊社会教育』785, 2021.10, p.40-43. など多数の雑誌記事, 新聞記事がある。

⁶ 磯井純充『「まちライブラリー」の研究:「個」が主役になれる社会的資本づくり』みすず書房, 2024.2, 236p.; 「特集・まちライブラリーの今」『図書館雑誌』118(9), 2024.9, p.540-553.

⁷ 土肥潤也「ケースインタビュー4:みんなの図書館さんかく:公共性の再構築とコミュニティ形成のための場としての図書館」『LRG:ライブラリー・リソース・ガイド』41, 2022.11, p.86-100.; 前掲4) 直井. この他, 新聞等でもその動向が多数報道されている。

⁸ 内沼晋太郎『これからの本屋読本』NHK出版, 2018.5, 317p. なお, 「文芸文化ゼミII」開講当時は, 独立系書店という用語が定着しておらず, 授業内ではひとまず「セレクト系書店」と表記していた。

⁹ 桂まに子「情報サービス演習と「レファレンスPOP」:発信型情報サービス向上の一助となる新ツールの開発」『京都女子大学図書館情報学研究紀要』1, 2013.3, p.15-27.

¹⁰ 長澤多代「「情報サービス論」(人文学部・司書課程科目)の受講生が作成したレファレンスPOPのご紹介」『三重大学付属図書館』<https://www.lib.mie-u.ac.jp/lib_news/pop.html> [参照日:2024.09.21]

¹¹ 前掲9), p.22.

¹² レファレンスPOP作成に伴うクイズの設計につい

ては, 前掲10)の長澤の実践を参照して授業を展開した。

¹³ POPづくりについては以下の図書を参照した。『この本, おすすめします!』編集委員会編『POPを作ろう』汐文社, 2022.2, 31p. (みんなで図書館活動:この本, おすすめします!, 1); 沼澤拓也『繁盛店が必ずやっているPOP最強のルール』ナツメ社, 2012.3, 223p.; 根本大作編『POP王の本!:グッドセラー100&ポップ裏話』新風社, 2006.11, 143p. など。

¹⁴ 藤原みなみ「ミュージアムを活用した新しい教育:角川武蔵野ミュージアムの教育事業の実践から考える」『教育情報研究』38(3), 2023.3, p.27-34. なお, 施設概要については次のページを引用した。< <https://kadcul.com/museum/overview>>. [参照日:2024.09.21]

¹⁵ ここでの「選書ワークショップ」(参加者は石川研究室の学生)とは, ①各グループテーマを設定, ②テーマを説明するストーリーを検討しながら同館開架図書を選書, ③選書した図書のプレゼンテーションと意見交換という流れであり, 同館の学芸員をはじめスタッフの方々との打ちあわせを重ねてプログラムを実施させていただいた。

¹⁶ こうした見学の視角については, 次の資料を参照した。「世界一美しい本屋の作り方」『建築知識』782, 2020.1, p.24-97.

¹⁷ 「EDIT TOWN 9つの「世界の読み方」」『百問』< <https://www.hyakken.co.jp/shigoto/edittown/>> [参照日:2024.09.21] 同サイトにそれぞれの区分の解説が記されている。

¹⁸ 東久留米市立図書館「図書館フェス2023:ひとハコ図書館」< <https://www.lib.city.higashikurume.lg.jp/soshiki/6/chuou-hitohako2023.html>> [参照日:2024.09.21] ここでは15館の「ひとハコ図書館」の紹介が具体的に紹介されている。

¹⁹ 藤井慶子「E1696「ひとハコ図書館」からはじめる新しい図書館」『カレントアウェアネス』286, 2015.8. < <https://current.ndl.go.jp/e1696>> [参照日:2024.09.21]

- ²⁰ 「一箱古本市」については、以下を参照。なお、本科目での「ひとハコ図書館」づくりの展開についても、「一箱古本市」や「まちライブラリー」、そして各地の「ひとハコ図書館」から着想を得た。「特集：一箱古本市の楽しみ」『「本と町をつなぐ」雑誌：ヒトハコ』1, 2016.11.; 花井裕一郎「CA1813「本がある」交流広場、まちじゅう図書館」『カレントアウェアネス』319, 2014.3.< <https://current.ndl.go.jp/ca1813>> [参照日：2024.09.21]
- ²¹ 儀井純充『マイクロ・ライブラリー図鑑』まちライブラリー, 2014.5, 192p.; まちライブラリー, マイクロ・ライブラリーサミット実行委員会2014編著『マイクロ・ライブラリー：人とまちをつなぐ小さな図書館』学芸出版社, 2015.5, 238p.
- ²² 和光市図書館「「みんなのひとハコ図書館」を展示しています」<https://www.wakolib.jp/oshirase/post_14.html> [参照日：2024.09.21]
- ²³ 「本と喫茶 夢中飛行」については、前掲4)の直井のほか、以下の情報を参照（いずれも参照日は2024.09.21）。「地元・さいたまのためにできること。デザイナーが選ぶ、日常の価値に気づく本：大宮「本と喫茶 夢中飛行」」『じんぶん堂』2023.10.6. <<https://book.asahi.com/jinbun/article/15014322>>:「みんなでつくる私設図書館「本と喫茶 夢中飛行」シェア本棚で新しい出会いを！」『彩ニュース』2023.8.28. <<https://sai-news.com/2023/08/28/enjoy-22/>>;「オーナーの思い入れ満載のシェア本棚:展示会やイベントも」『朝日新聞』2024.4.25.
- ²⁴ 「でこぼこ書店」については、以下の情報を参照（いずれも参照日は2024.09.21）。「でこぼこ書店」<<https://decoboco-books.shopinfo.jp/>>;「北与野に本と人をつなぐ「でこぼこ書店」書店×教育をコンセプトに」『大宮経済新聞』2023.11.30.< <https://omiya.keizai.biz/headline/1807/>>;「でこぼこ書店(埼玉) 本を介して人が集まり、学ぶ場所。元バスケット青年が始めた小さな挑戦」『好書好日』2024.5.12. <<https://book.asahi.com/article/15257935>>
- ²⁵ 「NABO」は2019年9月に閉店し、2020年11月に「本屋未満」として再オープン、そして2021年6月に「本と茶「NABO」by VALUEBOOKS」となった。詳細は以下の情報を参照。「本と茶「NABO」by VALUEBOOKS」『itot』<<https://itot.jp/p20/374>> [参照日：2024.9.21];「約3000冊が並ぶブックカフェ「本屋未満」@上田市」『長野こまち』<<https://www.web-komachi.com/?p=29364>> [参照日：2024.9.21] など。
- ²⁶ ビブリオバトル普及委員会編『ビブリオバトルガイドブック』ルール改訂版, 子どもの未来社, 2023. 9, 117p.
- ²⁷ なお、こうした授業展開を通して、2024年度は両書店へのインターンシップも実施させていただいた。
- ²⁸ 坂本旬『メディア情報教育学：異文化対話のリテラシー』法政大学出版局, 2014.3, 227p.
- ²⁹ 公共図書館における移動図書館への考えを踏まえている。石川敬史「地域の伴走者としての移動図書館へ」『みんなの図書館』510, 2019.10, p.2-10.
- ³⁰ 嶋田学「おわりに：これから一緒に考え、実践したいこと」『LRG：ライブラリー・リソース・ガイド』48, 2024.8, p.114.